

# Mutual enlightening of Satoumi culture in the Pacific Rim for next generation:Ryukyu Arc Adan Summit 2019

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kinoshita, Yasuko, Urata, Makoto, Takekawa, Daisuke メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00062726">https://doi.org/10.24517/00062726</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 実践報告

# 環太平洋域里海文化の相互理解と次世代継承： 琉球弧アダンサミット2019

木下 靖子<sup>注1, 注2</sup>・浦田 慎<sup>注1, 注2</sup>・竹川 大介<sup>注3</sup>

## 要 旨

日本の南西諸島と南太平洋に点在する島嶼国には、アダンを利用する多様な文化や技術が共通して存在する。沖縄ではプラスチック等の人工素材の普及でアダン文化は失われつつあるが、南太平洋域ではアダンは現在も日常的に利用されており、作り手の技術やコミュニティの伝統的な文化を表現するものとなっている。また、島嶼部の現金収入源のひとつでもある。アダンサミットは、共通するアダン文化を持つ環太平洋域の人たちを結ぶ国際交流の催しである。第3回となる今回は、4名の研究者による講演のほか、バヌアツから技能者4名を沖縄に迎え、アダン文化の交流をキーワードに、文化・技術継承、沿岸部の環境保全、脱プラスチック政策などについて、議論が交わされた。

## I. 開催趣旨

### 1. 背景

日本の奄美以南、沖縄、宮古諸島、八重山諸島に連なる琉球弧と呼ばれる地域と、南太平洋に点在する島嶼国には、アダンを有用植物として利用する文化や技術が存在する。地域ごとに細部に違いはあるが、アダンを重要な植物とし利用してきた点は共通する。

沖縄では、古くからアダンを用いて作る民具が使われていたことがわかっているが、1950年代以降、自然素材から作られていた民具はプラスチック等の人工素材で作る工業製品に急速に置き換わっていった。現在、沖縄では、日常生活的な生活用品としてアダン民具はほとんど使われず、作り手の高齢化とともに民具を作成する技術は失われつつある。

一方、南太平洋域においては、アダンの民具を作成すること、使用することは現在

も日常的に行われている。特に、筆者の木下と竹川は2007～2009年の期間にバヌアツ共和国(Republic of Vanuatu, 以下バヌアツ)に滞在した中で、主に女性たちの手仕事として、アダンによるバッグやマット(ゴザ)類を作っていること、また日常的に利用している様子を見てきた(図1)。その中でも特に装飾的な模様を編みこんだバッグは、作り手の技術や、コミュニティの伝統的な文化を表現するものでもあった。また、都市部から離れた島嶼部に住む人たちの主な現金収入源となっていた。

アダンサミット開催の目的は、共通するアダン文化を持つ環太平洋域の人たちを結ぶ国際交流である。第3回となる今回は、バヌアツのフツナ(Futuna)島からアダンのハンディクラフトの技術者ら4名をゲストに迎え、アダンの葉の加工や編む技術について紹介してもらった。またアダン文化の交流をキーワードに、文化・技術継承に関わる課題、沿岸部の環境保全に関する課題、脱プラスチックに向けた政策についてなど、議論を交わす場になった。

## 2. アダンとその利用

アダン(阿檀, Textile screw pine, *Pandanus odorifer* (Forssk.) Kuntze, 本報告では *Pandanus tectorius* Parkinson ex Du Roiを含める)は、タコノキ科タコノキ属の常緑の小高木で、英名でパダンナス(Pandanus)とも呼ばれる。亜熱帯から熱帯の海岸近くに生育し、高さ2～6mほどになる密集した群落を作る(Forsskål, 1775; Kuntze, 1891; 宮本, 2015)。成長とともに横に伸びた枝から気根が垂れ下がり、接地して支柱根となる。この支柱根により、風に強い安定した樹形が形成されるため、南西諸島では琉球王府時代に防潮林・防風林・砂防林として海岸に人為的に植栽されてきた歴史がある(Purves, 2014)。グアムではAggag, AggakもしくはAkgak, フィリピンではPandanもしくはSabotan, サモアではFalaもしくはLau-fala, ハワイではHalaもしくはLau-halaと呼ばれるという(Safford, 1905)。バヌアツ共和国フツナ島ではFaraと呼ばれる。同属でバヌアツ固有種の *Pandanus halleorum* はレッドリストで危急種(Vulnerable species)とされている(World Conserv. Monit. Cent., 1998)。

南太平洋域では、葉、気根、幹、果実など、ほぼ全ての部分が、道具作りの材料、食用、燃料など多様に利用されている。気根からは船具、漁具用のロープを作ったり、実を食用や燃料として使ったりする地域もあり、用途に合わせ、品種が島や地域ごとにつくられてきた。特に、細長い葉は、しなやかで丈夫という特徴を持ち、細長い葉は、家の壁のほか、バッグ、マット、帽子、草履など生活用品を作る材料に用いられている。バッグやマットは日用品として使われているだけではなく、婚資や香典などの特別な祝儀(贈り物)としても使われることがある。

沖縄でも、島ごと地域ごとに様々なアダン文化が存在する。宮古諸島の池間島では、気根をアダナスと呼び、沿岸漁業で活用するロープ、海岸（サンゴ礁上）を歩くときに専用にする草履、採取した貝などを入れる網袋を作るのに使う（盛口，2017）。これらの多くは、現在はプラスチック等の別の素材に置き換わっている。池間島において、アダナスで実際にロープを作る体験をしたことがあり、教えることができるのは、70～80代以上の人たちである。アダンサミットのような催し、地域の小中学校の授業（総合的な学習の時間）で行うワークショップは、アダン文化の技術を伝える機会となっているが、若い世代への技術継承は課題である（図2）。

### 3. 開催事業の概要

事業名：2019琉球弧アダンサミット in 海洋博公園

開催日：2019年11月23, 24日

開催場所：海洋博公園（海洋文化館・おきなわ郷土村・熱帯ドリームセンター等）  
沖縄県国頭郡本部町

参加者：バヌアツからの招聘者を含むアダン加工技術伝承者、海洋教育関係者、研究者、一般市民等

主催：内閣府沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所、  
2019琉球弧アダンサミットin海洋博公園実行委員会  
（事務局：一般財団法人沖縄美ら島財団）

後援：沖縄県教育委員会、独立行政法人国際協力機構（JICA）、  
一般社団法人能登里海教育研究所、沖縄タイムス社、琉球新報社

琉球弧アダンサミットは今回で3回目の開催となる。第1回は2017年に池間島（池間島離島振興総合センター、宮古島市）にて、主催はNPOいけま福祉支援センター、第2回は2018年に石垣島（石垣青少年交流の家、石垣市）にて、主催は石垣島アダンサミット実行委員会で開催した。筆者は第1回サミットより運営に関わっているが、第3回ではバヌアツからのゲスト4名の来日の付き添いと通訳を担当した。第1回、2回のアダンサミットでは、主に沖縄県内のアダン文化・技術継承者、一般参加の地域間交流、アダンに関する学術的な研究や地域の環境保全活動の報告・発表、小学生による地域のアダン文化を調べた発表、幼稚園生によるアダン民話のパフォーマンスなどを行った。

第2回石垣島サミットにおいて、アダン文化の国際交流を目的にバヌアツ共和国からゲストの招聘をすでに企画していたが予算を確保できず、第3回海洋博公園サミッ

トにて実現した。海洋博公園には、沖縄を含め太平洋域の文化を紹介する博物館、海洋文化館がある。第3回サミットは、この海洋文化館を主な会場とし、国際交流の特別企画として開催された。

## II. 事業内容

### 1. アダンに関する講演会

アダンサミット1日目は、海洋文化館を会場に、アダンに関する講演会が行われた(図3)。盛口満氏(沖縄大学 学長, 植物生態学), 筆者である竹川(北九州市立大学 教授, 人類学), 生沢均氏(公益財団法人沖縄県緑化推進委員会 常務理事), 花城良廣氏(一般財団法人美ら島財団 理事長) 4名の講演の後、バヌアツ、フツナ島から招聘したジミー・ソウシアラ(Jimmy Sausiara)氏ら4名による、アダンバスケットを編みパフォーマンスと解説が行われ、参加者からは、葉の加工の仕方や道具の使い方、編み方などについて熱心に質問が出た(図4)。会場である海洋文化館内には、長距離航海用大型カヌーの展示があり、帆はアダンの葉を編んだものが使われているなど、南太平洋域の伝統的な暮らしにいかにかアダンの葉が重要であったか、参加者は興味深く見ることができた。

#### 1) 盛口満「海流散布植物と人間とのかかわりーアダンやそのほかの植物」

漂着物と人との関わりは、平安時代末期に書かれた『今昔物語』にも見られる。古来より人々はまだ見ぬ海の向こう側より運ばれてくるものに興味を抱いていた。「海の幸にはユリムンというものがある。流木はユリキという。建築材にすることは忌まれるが、家具や巻にするのは忌避されない。ユリムンには、海の幸という意味合いもある。例えばクジラや、魚の大群など、小魚の大群が岸近くによることもニライカナイの贈り物と信じられていた。」(『奄美生活誌』)とあり、漂着物に対して人々が特別な念を抱いていたことがわかる。沖縄の沿岸を歩いていて採取できる海洋散布植物の種子は代表的なものに、ヤシ、モンパノキ、ナンヨウソテツモダマ、ビロウ、モモタマナ、ミフクラギ(オキナワキョウチクトウ)、サガリバナ、ゴバンノアシ、オオハマボウがある。アダンもそのひとつである。沖縄では島や地域によって、アダンを多用に利用してきた。特に宮古諸島の池間島では、実について、ツガキ、バス、アダンツと用途・部位別に細かく名前がつけられているなど、生活において利用が盛んであったことがわかる。

南の島には、海辺に生育するさまざまな植物がある。海辺という過酷な環境にくら

す植物には特性がある。種子散布に海流散布が多いというのは共通点だが、種によって、繊維質であったり、湿地への耐性があったり、幹や葉に特有の有用性があったりする。そうした植物の特性に、人々は昔から目を向け、地域ごとに特有の関わり、生物文化を生み出してきた。アダンもそうした植物の一つであり、特に有用な植物として重宝されてきた歴史がある。

講演では、実際に盛口氏が会場に持ってきた珍しい漂着物であるフタゴヤシノミやモダマから作られた根付など、参加者は手に取って観察することができた。

## 2) 竹川大介「バヌアツ共和国フツナ島民のアダン利用－太平洋と沖縄をつなげるアダン」

バヌアツにある直径4キロメートルの小さな島であるフツナ島では、南太平洋の島々の中でも、もっとも洗練されたアダン細工の技法が主に女性たちの手仕事として継承されている。バスケットなどを編む前に行う葉の加工法が、他の南太平洋域では採取した葉を茹でてから使う地域が多数派だが、フツナ島では自然に枯れて乾燥した葉を採取し、茹でずに使用するなど独特な技法がみられる。フツナ島の“生きている”アダン文化について紹介する。生きていると形容する特徴として、まず、美術工芸品などではなく実用品として日常的に使われる点あげられる。フツナ島のような離島でも、首都ポートビラでも、人々が日常的にアダンのバスケットを使用している姿が見られる。現在、ポートビラには街の中心地に「ハンディクラフトセンター」があり、土産物としてアダンのバスケットが販売され観光客も立ち寄る場所となっているが、地元の人たちが購入できないような高額な価格で販売はしていない。次に、新しいデザインが今でも考案されているということがあげられる。伝統的な権威がある工芸品のように、デザインを保守することはなく、アダンバスケットは現在でも新しいデザインが考案され、流行が生まれている。最後に特徴として、バスケットのデザインに著作権があることをあげる。バヌアツの人たちは、伝統的なバスケットのデザインを見て、概ねこの島で作られたものかわかる。また、さらに島の中では、編みこまれた模様によって、どの家系の人で作ったものか、作り手が誰かまでわかることがある。新しいデザインを生み出す進取性はあるが、一方、できあがったデザインに対して著作権を認め、他者が模倣することはよくないこととされている。日本の民具が生活用品を離れ、伝統的な美術工芸品として生き残っていることと比較すると、バヌアツのアダンバスケット文化は異なっていることがわかる。

講演会の会場である海洋文化館の展示には、竹川が収蔵したフツナ島でつくられたバスケットや儀礼用の衣装がある。参加者は、小さな編み目では1mmほどとなるフツナ島のアダン工芸の編み目に感心していた。またスライド写真で紹介するバスケット

トのデザインの流行についても興味深く見ていた。

### 3) 生沢均「海岸林に出現するアダンについて」

海岸林とは、海岸に沿って造成される樹林帯である。防風施設としては最も海岸部に構築されるもので、より内陸部に土地改良事業等でさらに農地防風林が構築されることもある。海岸林は主に潮害防備保安林として指定されている。保安林は、国あるいは県が指定し、県が管理するもので、形状の変更や立木の伐採が制限されている。沖縄県の保安林は、30631 haが指定されている。そのうち4520 ha (14%)が防風・潮害防備保安林となっている。沖縄県の海岸総延長1411 kmのうち、保安林による海岸防備範囲は603.2 km, (3462 ha) となっている。

一方、沖縄県の農地防風林の整備実績は下記の通りとなっている。

表：沖縄県の農地防風林の整備実績

地域	北部	中部	南部	宮古	八重山	沖縄全県
農地面積 (ha)	7,306	2,985	8,546	2,382	5,037	35,000
整備率 (%)	30	20	7.5	22.2	59.9	25.5

沖縄地方の風向特性は、冬季は大陸高気圧の影響で北西～北東の風が卓越し、夏季は梅雨前線、台風の影響で南寄りの風となる。これら海域からの風による影響には、含まれる塩分、砂、台風等による強風がある。海岸から内陸部に到達する塩分の量(飛塩量)には地域差があり、特に海岸線から200 m付近以遠は、地域差が大きくなる。沖縄県で飛塩量が多いのは、サンゴ礁で生じた飛沫から多量の塩粒子が発生するためと考えられる。他に、飛ばされてくる砂(飛砂)、台風等の強風により、植物・農地等への被害が生じる。飛砂では、樹皮の損傷、葉に穴が開くなど植物体への被害がある。台風等の強風では樹木の枝が折れ、倒木の被害があるが、その程度は樹種により異なっている。

農地防風林に適した樹種は、各樹種の被害の受けやすさと回復能力で評価される。A被害を受けやすいが回復が早いもの、B被害を受けにくいだが回復が遅いもの、C特に強く、被害がほぼないもの、に大別される。特に強風・塩害に強いCには、アダン、アカテツ、テリハクサトベラ、フクギ、モンパノキ、リュキュウコクタンが該当する。

海岸林の減風効果については、風洞実験で検証されている。低木を伴わない構成の海岸林を模した実験では、林冠部が顕著な減風効果を示す一方で、林冠下部を抜ける風により林帯の内側に比較的強い風域が生じる。低木がある場合は林帯樹高の23倍長

の内陸付近まで減風効果があることが示される。

沖縄県では主に台風により樹木被害が生じており、これらの実態と樹種の特性や構造的な減風効果を踏まえて、治山事業・海岸林の造成が進められている。宮古島市では、アダンの特性を生かし、グリーンベルトとしてのアダン植栽が行われている。

参加者からは、沿岸に生えるアダンについて、沖縄の気候において防風や防潮の効果が高い理由がよくわかったという感想が聞かれた。

#### 4) 花城良廣「海洋文化館と「アダン文化」—自然環境保護の問題を考える」

1975年に開催された沖縄国際海洋博覧会のレガシーとして海洋文化館は現在に残る施設となっている。1975年当時のテーマは「黒潮に生きる」ということで、当時すでに太平洋の島々から消滅していた大型の伝統カヌーの復元、ミクロネシア・サタウル島から沖縄海洋博会場への航海などを行い、太平洋域の伝統カヌー建造技術と航海術という文化の発信に重要な役割を果たした。収蔵品には、世界的にも貴重な大型カヌー類、家屋を復元したもの、漁具や民具、歌や踊りの映像資料があり、太平洋域の文化を伝える博物館となっている。それらの多くには実はアダンが使われている。

沖縄に自生するタコノキ科(*Pandanceae*)の種類は、ツルアダン(*Freycinetia formosana*)、ヒメツルアダン(*Freycinetia williamsii*)、アダン(*Pandanus odoratissimus*)、トゲナシアダン(*P. odoratissimus f. laevis*)、カネアダン(*P. odoratissimus f. ferreus*\*講演資料の記載による)の主に5種類がある。天然記念物のヒメツルアダンは西表島に自生している。近年、外来のアダンの仲間では、街路樹としてタコノキ(*Pandanus boninensis*)が多く見られる。また、東南アジアでは重要なハーブとして栽培されているニオイタコノキ(*Pandanus amaryllifolius*)も栽培種として入ってきている。沖縄でみられるアダン文化と同様に、インド、東南アジア、ミクロネシア、ポリネシア等の調査から、沿岸地ではアダンを防潮林、防風林として使ったり、アダンの葉をゴザ、草履、帽子、帆船の帆、家の屋根・壁材に使ったりすることがわかっている。沖縄ではみられないが、インドでは嗜好品として、アダンの雄花からオイルを抽出し香水を作る事例がある。

沖縄では、沿岸域のアダンの自生地を保安林としている。琉球王府の役人であった蔡温は、沖縄の村落形成と発展には風水を元にした緑化が必要とし、屋敷抱護、村落抱護、浜抱護として植物を植栽することをすすめた。現在でも沖縄の各地に、このように蔡温のすすめによって植栽された樹木が形作る景観を確認することができる。浜抱護は沿岸域にアダンを植えることの重要性を伝えている。

参加者は、アダンの種類の多さ、海外での使用の事例について興味深く聞いていた。

また、大型カヌーの帆船の帆をはじめ、アダンの葉を使用した会場の収蔵品の紹介により、講演後、展示を見回る参加者が多かった。

## 2. アダン工芸ワークショップ

アダンサミット2日目は、おきなわ郷土村(海洋博公園内)において、一般参加者がアダンの民具づくりを体験できるワークショップが行われた。沖縄からの出展グループは8つ、バヌアツのグループが1つ、それぞれがブースを構えて、ワークショップ形式で作品の作り方を紹介し、作品の展示、販売を行うところもあった。

バヌアツ、フツナ島から来たのは、ジミー・ソウシアラ氏、ジェニー・ナウィタ(Jenny Nuaita)氏、ジェニン・ウィリー(Janine Willie)氏、エブリン・イノス(Evelyn Enos)氏の4名である。ソウシアラ氏は男性でフツナ島でチーフ(村長)のひとりを務める。フツナ島のアダン文化、自然資源の保全、沿岸域の環境保全について解説を行った。ナウィタ氏ら3名は女性で、アダンの葉を編む技術が高いということで今回フツナ島の代表として来日した。彼らが島から持ってきた、編む前の材料として加工したアダンの葉を紹介し、バスケットを編み始める最初の工程を参加者に見せた(図5, 6)。参加者らは実際にバヌアツのアダンの葉に触り、沖縄のものとの感触の違いを述べていた。沖縄のものは比較的葉に厚みがあり弾力があるが、バヌアツのものはより薄いため、3, 4 mm程度に細く裂いたり、編んだりしやすいのではないかという感想が聞かれた。

沖縄の出展グループは、工房ori to ami(糸数弓子氏)、Amateras×ワークリンクサザン(就労継続支援事業B型、佐藤絵里奈氏)、伊江島amuamu(屋嘉比りさ氏)、書浪人善隆、Ne\_izumi(柿沼泉氏)、蔓草庵(島袋正敏氏)、一般社団法人沖縄美ら島財団(西平守孝氏)、くんじゃん草あみの会(知花直子氏)らで、アダンの葉を材料とするパナマ帽子、草履、アクセサリ類、玩具類、アダンの実を材料とする筆、アダンの実や芽の部分料理した弁当などを紹介した。

フツナ島のナウィタ氏らは、ワークショップへの一般参加者の他、沖縄の出展グループとの交流を行った。特に、細かい編み目を特徴とする琉球パナマ帽子をつくる糸数弓子氏の技術について興味を持ち、加工の仕方、編み方などを教えてもらっていた(図7)。また、フツナ島にはアダンの葉で草履を作る文化はないため、草履の展示についても関心が高かった。

参加者の多くは沖縄在住のアダン工芸に関心を持つ人たちであった。沖縄以外で太平洋のアダン文化といえばハワイというイメージが強かったが、今回のサミットに参加して、バヌアツをはじめ南太平洋に豊かなアダン文化があることを、講演や海洋文化館の展示、ワークショップによって知ることができたという感想が聞かれた。

### Ⅲ. まとめ

#### 1. 沖縄とバヌアツにおけるアダン文化継承の現状と課題

今回、沖縄とバヌアツのアダン文化をテーマにした国際交流の場を通じて、アダン民具、民具づくりの技術について、沖縄とバヌアツの現状を比較し、文化継承の課題が明らかになった。

沖縄におけるアダン民具の市場的な価値について、現在は工芸品として比較的高価格になる傾向がある。かつては、アダンの葉でつくる道具は、例えば、うちわ、マット、草履など、日常的な暮らしの中で使われるものであった。しかし、現在、作り手の高齢化とともに民具づくりの技術が急速に失われつつある中、技術者を育成するためには、工芸品として高い価格で売ることが戦略のひとつとしてある。工芸品に位置付ける戦略は、沖縄を訪れる観光客への土産物や、県外で開催される沖縄物産展などで紹介されることによって、知名度を上げ、経済的に技術者を支えることになる。しかし、民具の市場的な価値が高くなるほど、地元の人たちが日常生活で使うことから離れたものとなる。これは、日本の伝統的な竹細工の工芸についてもあてはまるだろう。

一方、バヌアツをはじめ太平洋域の島嶼部の国々では、アダンの葉によるバスケット、マットといった民具を、一般的な日用品として現在も使用している。材料の供給が安定していること、作り手が多いということが沖縄との違いになっている。しかし、バヌアツにおいても、流通、価格については議論があり、さまざまな実践が試されていることが、ジミー氏らから聞かれた。バヌアツのフツナ島では、技術者である女性たちが生産者のグループを作り、運営を始めているという。これは、バヌアツの首都ポートビラにはハンディクラフトマーケットがあり、そこに離島の人たちは製品を送り販売しているが、グループを作る目的は、フェアトレードになるよう価格の交渉を常に行うことと、需要と供給のバランスを取るために供給量を調整すること、バスケットの意匠について盗用がないよう確認することなどがあるという。竹川の講演にもあったが、バヌアツではバスケットのデザインについて、島や地域によって違いがあり、それを他地域の人が模倣することは禁止されている。このように技術者の権利を認めつつも、元来、アダンの民具が持つ日用品としての特性を失わず、現在も多くの人たちの暮らしの中で生きているアダン文化があるバヌアツの事例を、今後の沖縄の民具の技術継承の課題解決のために参考にしたい。

また、バヌアツでは政策として、脱プラスチックが掲げられている。2019年より、マーケットや小売店において、プラスチックバッグ(ビニル袋)の使用禁止の法律が制定さ

れた。これにより、いわゆる買い物に用いる「マイバッグ」としてのアダンの葉のバスケットの需要が高まっていると、ジミー氏らが説明した。現在、世界的に解決しなければならない喫緊の課題として海洋プラスチックごみ問題がある。太平洋域のアダン文化も、プラスチックに代替する自然素材のひとつとして注目が集まることが予想される。

## 2. 里海教育と国際交流の必要性

現在日本では、海洋基本法のもと2018年5月に策定された第3期海洋基本計画において「2025年までに全ての市町村で海洋教育が実践されることを目指し、「ニッポン学びの海プラットフォーム」の下、関係府省・関係機関間の連携を一層強化する(内閣府、文部科学省、国土交通省)」ことが明記されている。一方で、新学習指導要領においては、教科等横断的な学習や「主体的・対話的で深い学び」の充実、そして学習効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントの確立が求められており、海洋教育を効果的に取り入れた教育活動の展開が期待されている。報告者が所属する一般社団法人能登里海教育研究所は、地域の里海文化の教材化を図り、その実践支援にあたっている。

一方世界では、海洋に関わる環境問題への国際的な取り組みが加速している。近年の海洋ごみ問題の多様化、深刻化にともない、2018年6月にカナダで開催されたG7シャルルボワ・サミットにおいて、英国、フランス、ドイツ、イタリア、カナダの5カ国とEUが自国でのプラスチック規制強化を進める「海洋プラスチック憲章」に署名した。2017年12月の国連総会において宣言された「United Nations Decade of Ocean Science for Sustainable Development (2021-2030) (持続可能な開発のための国連海洋科学の10年)」の実施においては、海面上昇を含む気候変動リスクと海洋プラスチックごみ問題はいずれも主要なテーマであり、日本を含む北太平洋地域ワークショップにおいては「Satoumi(里海)」がその課題解決に向けた一つのキーワードとして取り上げられ、具体的な成果が求められている(日本海洋学会, 2019)。日本からは年間2~6万トンのプラスチックが流出していると推定されており(Jambeckら, 2015)、直接的な排出抑制や回収、調査活動が推進されている。特に近年は生分解性素材への関心が高まり、大麦を使ったストローなど代替素材による脱プラスチックの動きなどが報道されている。

以上の状況と課題を踏まえると、今回のサミットの意義・成果として、以下の3点をあげることができる。

- ・持続可能な社会構築に向けての、伝統的里海文化の理解と継承
- ・海洋環境問題の解決策としての、天然有機素材への再評価

・地球レベルでの課題解決のための、国際的交流と相互理解

今回のサミットの成果を活かし、今後の発展的な成果に結びつけていくには、情報交換と国際的交流の場が継続されること、そしてより多くの人や国にその知見や情報が共有される海洋教育の仕組みづくりが必要と考えられる。アダンとアダンサミットが、国際的な視点での里海文化の学びと課題解決に、より大きな役割を果たすことを願っている。

（本報告書は、日本財団支援事業「学校教育課程における海洋教育の普及推進と指導者の育成」ID:2018484759による）



図1 アダンの葉を編む女性たち(バヌアツ・フツナ島 2007年)



図2 アダンの気根(アダナス)でロープの作り方を示す女性たち(池間島 2017年)



図3 講演の様子(海洋文化館)



図4 フツナ島のアダンを編む作業を紹介するナウイタ氏ら(海洋文化館)



図5 ワークショップの様子(おきなわ郷土村)



図6 ワークショップの様子(おきなわ郷土村)



図7 糸数弓子氏(中央)と交流するナウイタ氏(左)とイノス氏(右)

【注】

- 1 金沢大学環日本海域環境研究センター
- 2 一般社団法人能登里海教育研究所
- 3 北九州市立大学文学部人間関係学科

【参考文献】

- 宮本句子(2015) タコノキ科PANDANACEAE, 大橋広好他5名編 改訂新版日本の野生植物1 平凡社 東京 p155-7
- Forsskål, Pehr (1775) *Flora Aegyptiaco-Arabica. Sive Descriptiones Plantarum, Quas per Aegyptum Inferiorem et Arabium Felicem Detexit, Illustravit Petrus Forskal. Prof. Haun. Post Mortem Auctoris editit Carsten Niebuhr. Accedit Tabula Arabiae Felicis Geographico-Botanica. Hauniae. col. no. 172 (as *Keura odorifera*).*

- Kuntze, Carl Ernst Otto (1891) *Revisio Generum Plantarum: vascularium omnium atque cellularium multarum secundum leges nomenclaturae internationales cum enumeratione plantarum exoticarum in itinere mundi collectarum*. Leipzig. col. no. 2-737
- Safford, William Edwin (1905) *The useful plants of the Island of Guam; with an introductory account of the physical features and natural history of the island, of the character and history of its people, and of their agriculture: Contributions from the United States National Herbarium v. 9*. pp 416.
- World Conservation Monitoring Centre (1998) *Pandanus halleorum*. The IUCN Red List of Threatened Species 1998: e.T37546A10063061
- Jambeck, JR., Geyer, R., Wilcox, C., Siegler, TR., Perryman, M., Andrady, A., Narayan, R., Law, KL. (2015) Plastic waste inputs from land into the ocean. *Science*, 347, 768-771.
- Purves, John Michael. Chen, Bixia. (2014) 「蔡温の農務帳」琉球大学農学部学術報告 (61), 1-9, 2014-12
- 竹川大介 (2007) 「伝統社会における資源の生産・管理・贈与・交換とその説明不可能性について——ヴァヌアツ共和国フツナ島での禁忌をめぐる考察」岸上伸啓編『先住民による海洋資源の流通と管理』(平成15年度～平成18年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書・課題番号15251012) pp. 301-328
- 日本海洋学会 (2019) 「持続可能な開発のための国連海洋科学の10年(2021-2030)」の準備状況と今後. 日本海洋学会ナイトセッション2, 2019年9月28日富山国際会議場

## **Mutual enlightening of Satoumi culture in the Pacific Rim for next generation:**

**Ryukyu Arc Adan Summit 2019**

KINOSHITA Yasuko, URATA Makoto, TAKEKAWA Daisuke

### **Abstract**

Both the Southwest Islands in Japan and the South Pacific countries have a wide variety of cultures and technologies that use Adan in common. However, in Okinawa Japan, Adan culture is now disappearing due to the spread of plastics and other artificial materials. In the South Pacific, Adan is still used in daily life and expresses the craftsmanship and the traditional culture of the community. It is also one of the sources of cash income for the residents of these islands. The Adan Summit is an international conference that connects people in the Pacific Rim community by Adan culture. In last 3rd conference in Okinawa Japan was held with four craftsperson invited from Vanuatu. Lectures by four researchers were followed by discussions on the key word Adan, cultural and technological inheritances, environmental conservation in coastal areas, and a policy of plastic-free.